様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０１６１４

研究課題名（和文）江戸武家地の成熟過程に関する建築史・都市史的研究

研究課題名（英文）The Maturing Process of Samurais' Dwelling Districts in Edo

研究代表者
藤川　昌樹（FUJIKAWA, Masaki）

筑波大学・システム情報系・教授

研究者番号：９０２２８９７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：江戸の武家地が、近世中・後期にかけていかに成熟して行ったかを、日本建築史・日本近世史の研究者による学際的研究組織により、建築・都市の両面に着目して解明しようと試みた。江戸の大名屋敷は、藩主とその家族のための「御殿空間」と家臣等の「詰人空間」からなるが、成熟のプロセスを、①御殿空間では、下屋敷のみならず上屋敷でも庭園等が整備され、また、旧藩主の夫人の住宅や御守殿などの屋敷内屋敷が独立したこと、②詰人空間は内長屋の増加や屋敷内神社の成立等により自立・充実したこと、③これらの結果、各屋敷地は大規模化したため、都市レベルで調整するべく相対替えや抱屋敷・抱地が増加したとみられること等が解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの江戸の武家地研究は、明暦の大火(1657)による変化を重視し、それ以前の江戸の華やかさを描く一方で、大火後の姿については都市改造を過大に評価する一方で、建築についてはネガティブな評価を下すことが多かった。本研究では明暦大火の評価自体を見直すとともに、屋敷自体の大規模化やその質的充実についても着目し、研究を実施した。学際的な研究組織・研究手法とともにGISをも用いて研究を進めた点に特徴がある。

研究成果の概要（英文）：An interdisciplinary research organization of researchers has attempted to elucidate how the samurai residence districts in Edo matured during the middle and late modern period, focusing on the both scales of architecture and city. The process of maturation of the Edo daimyo's mansions, which consisted of the "goten space" for the feudal lord and his family and the " tsumenin space" for vassals and others, was described as follows: (1) In the goten space, gardens and other facilities were developed not only in shimo-yashiki but also in the kami-yashiki, and the houses of wives of former feudal lords and the Shogun's daughters became independent; (2) In the tsumenin space, the number of inner row houses and shrines in the house increased and it became independent and was enhanced; and (3) As a result of these developments, each residence became larger in scale, and it is likely that the number of aitaigae, kakaeyashiki and kakaechi increased in order to adjust them at the urban level.

研究分野：日本建築史・都市史

キーワード：大名屋敷　明暦の大火　御殿空間　詰人空間　庭園　茶室　GIS　御成御殿

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在の江戸武家地に関する建築史分野からの研究の基礎は、1950-70 年代にかけて、平井聖・内藤昌・西川幸治・佐藤巧らの近世住宅史研究者によって形作られた。その後の都市史研究の隆盛の中で江戸武家地に関する研究も 1980 年代以降進展したが、課題も多く見受けられた。その一つは、江戸武家地全体が如何に変容したかという大局的な理解を志す課題が後回しにされていたことであり、今一つは、個別の武家屋敷研究に関しても、論者個々人の関心や使用史料の残存時期に限定され、武家地の通時的な検討が限られていたことである。

以上のような認識にもとづき、本研究チームは、2012 年～2014 年に科研費基盤 B「江戸武家地の空間変容に関する文理統合的研究」を取得し、武家地に関するデータを GIS 上に構築するなどの作業を行った。だが、建築史・都市史分野からみた時、主として次の 2 つの課題が依然として残されていた。

一つは、明暦の大火で華やかな御殿建築が失われ、以後は見るべきものはないというネガティブな解釈からの脱却が行われておらず、中・後期の武家地の建築についての研究が方向性を持たなくなっていたことである。

もう一つは、建築レベルの研究と都市レベルの研究とが十分に接合されていなかったことである。1980 年代以降の研究は考古学・日本史学の研究者がリードしたものであり、幕府の武家地政策、土地の需給システム（相対替等）、周辺社会との関係、個別の屋敷の遺跡・遺物、などに関する研究が数多く蓄積された。しかし、武家地・武家屋敷に関する建築史的知見は、現時点の都市史研究のレベルとあまり接点を持たないまま更新が行われないままであった。

２．研究の目的

本研究では、江戸の武家地・武家屋敷が、明暦大火の災禍を乗り越え、幕末に向けて成熟を遂げていったという仮定のもと、

1)武家屋敷のいかなる側面でそのような成熟が確認され、それぞれの画期となるのは何時か？

2)個々の屋敷の成熟は、江戸の武家地全体にいかなる影響を与えたか？

について解明しようとしたものである。

３．研究の方法

本研究でいう「成熟」は、具体的には次のＡ～Ｃに示した側面で起こったとの仮説を設定した。

Ａ：屋敷内空間は初期から中・後期にかけて、吉田伸之(1988)がいう「御殿空間」「詰人空間」へと分化したのではないか。それまで御殿=大名の空間に対して従属的な状態にあった詰人（家臣）達の居住空間が「詰人空間」として屋敷内で自立する点が重要であり、その際に屋敷内神社・詰人用の共同の風呂・八百屋等商業機能の成立が屋敷内で起こって、屋敷の空間の充実・安定化が図られたのではないか。

Ｂ：「御殿空間」においても、「表」に対して従属的であった「奥」の空間が独立し、「奥」の空間が接客機能とそのための専用入口を獲得するとともに、藩主やその家族の隠棲のための空間の独立化（屋敷内屋敷の成立）・増加、武家儀礼の複雑化・形式化による上屋敷・下屋敷双方での書院座敷空間の増加や庭園空間の充実などの変化が起こったのではないか。

Ｃ：Ａ・Ｂの変化により、個々の屋敷の面積を拡大する必要が生じ、相対替や抱屋敷・抱地が増加することで、江戸の武家地空間全体が拡大しながら再秩序化が進められていったのではないか。また、幕府はその武家地政策において基本的にこのような動向を許容するとともに、若干の積極的な関与があったのではないか。

上記の仮説を検証するべく、Ａ・Ｂに対応した個別屋敷空間の通時的分析と、Ｃに対応した幕末期の武家地空間のデータ・ベースの作成及び秩序の状態の共時的分析を実施した。

① 藩政史料調査

これまで大名屋敷関係史料の発掘・分析・紹介が十分に行われて来なかった庄内藩酒井家（致道博物館他）・秋月藩黒田家（秋月郷土館）、幕府作成の手書江戸大絵図（東京都公文書館）等の史料調査を実施すると共に、大名屋敷関係絵図・文献史料の撮影を行った。

② 「大名屋敷史料を読む会」の開催と釈文作成

23 年余にわたり開催してきた「大名屋敷史料を読む会」を引き続き月に 1 度のペースで開催し、未翻刻の文献史料の輪読を行い、釈文を作成した。輪読するには、金沢藩前田家・萩藩毛利家の作事関係資料を取り上げた。会の運営は首都圏在住の藤川・宮崎・高屋・稲垣・増田・佐藤が中心になって担当したが、研究会等と日程を合わせ、他のメンバーの参加も得た。

③ 空間分析α：屋敷空間の変容の把握

個別の武家屋敷空間の変容を、これまでに絵図史料を入手済みの萩藩毛利家・熊本藩細川家、また①で新たに入手した幕臣屋敷及び庄内藩酒井家・弘前藩津軽家など大名屋敷絵図が豊富に残されている屋敷を中心的な対象として、上記のＡ・Ｂの視点をもとに、それぞれの側面の変化の時点や様態を、絵図と文献資料を突き合わせながら通時的に分析した。

④ 空間分析β：江戸武家地データ・ベースの作成と秩序分析

これまでの研究で江戸武家地空間に関わる GIS 上のデータ・ベースを作成して来たが、「御府

内沿革図書」の外堀の内側の部分につき、復元図と所持者の情報を紐付けたデータ・ベースを作成した。

４．研究成果

(1)各年度の成果概要

1)2018 年度

本年度には、①「大名屋敷史料を読む会」を計 8 回開催し、毛利家文庫所蔵の「江戸御屋敷御書出」「桜田御普請諸沙汰控」の釈文を作成するとともに、②「御府内沿革図書」の GIS データ化を進める作業に注力し、各巻の「一円之図」を GIS に取り込み、敷地毎に GIS 上でのデータを付与し、現状地形に対応する当時の敷地のおおまかな分布を把握した。また、打合せ及び成果報告を兼ねた③研究会を 2 度（2018 年 6 月及び 2019 年 1 月）実施した。

2)2019 年度

本年度には、①これまで屋敷関係史料の発掘・分析・紹介が十分に行われて来なかった大名家（秋月藩黒田家・庄内藩酒井家）の史料調査、東京都公文書館所蔵の手書江戸大絵図の史料調査を実施すると共に、②「大名屋敷史料を読む会」を 5 回開催し加賀藩の「多賀留記（多賀日記）」）の釈文を作成するとともに、③「御府内沿革図書」にみられる敷地の経時変化を GIS で利用できるデータへと復元的に変換する作業を進め、④打合わせ及び研究報告を兼ねた研究会を 2 度（2019 年 9 月及び 2020 年 1 月）実施した。

3)2020～2021 年度

2020 年度はコロナ禍が深刻であったため、2022 年 3 月までの 2 ヶ年度にわたって研究を実施した。①国会図書館、明治大学博物館、三井文庫、岩国徴古館、等、における史料調査を行うとともに、②「江戸城下変遷絵図集」のデータを GIS 上の復元図に紐付ける作業を実施した。また、これらと平行して③「大名屋敷史料を読む会」を計 15 回開催し毛利家文庫所蔵の「麻布御部屋御裏両御殿御普請記録」「御中屋鋪御普請記録」の釈文を作成する一方、④打合せ及び研究報告を兼ねた研究会を計 10 回、いずれもオンラインで実施した。

最後に研究代表者・分担者および協力者が報告するシンポジウム「江戸武家地の成熟過程」を、オンラインで開催した（2022 年 3 月 27 日、参加者 30 名）。

(2)シンポジウムでの成果発表

1)岩本馨「明暦の大火前後の江戸武家地」は、明暦 3 年（1657）正月 18 日～20 日に勃発した連続火災、いわゆる明暦の大火の江戸武家地への影響について報告した。これまでの研究では、大火が当時の江戸の市街地の大半を焼き尽くし、そのため大火後には幕府によって江戸の大規模な都市改造が行われ、江戸はその領域を大きく拡大したとされてきた。これに対し本報告では、寛永江戸全図・「明暦大火前江戸大絵図」（三井文庫所蔵「江戸図　寛文年以前」）・明暦江戸大絵図・万治年間江戸測量図などの江戸図を丹念に読み込むことで、大火前後の江戸武家地の実態に迫った。具体的に検討対象としたのは、大火でほぼ全焼した江戸城周辺の大名屋敷エリア、小川町・駿河台などの旗本屋敷エリア、大火後の新市街地とされる「築地」である。分析の結果、①明暦の大火後の復興策は多くの面で大火前から連続していたこと、②被災した中心部の大名・旗本屋敷は原則として現地で復旧がなされたこと、③郊外への市街地拡大は大火前からの動向であったことなどが明らかにされた。明暦の大火を挟む 17 世紀中後期は、江戸の形の上での成長期であったといえ、その起点は明暦の大火というよりは寛永年間後期に求めるべきであろう。

2)宮崎勝美「文政元年江戸朱引図について」は、幕府が江戸＝御府内の範囲を初めて確定したと評価されている文政元年（1818）の老中裁定と、その際に作成されたいわゆる「江戸朱引図」について再検討した。都市江戸はその内外を分かつ境界が明確でなかったため、幕府内部でもその範囲がどこまでなのかが時折議論されていた。報告では発端となった目付の伺いから評定所における評議、そして老中裁定の内容を再点検した。評定所では江戸の範囲をめぐる先例を、①幕臣らの遠出に届出が必要な範囲、②寺社奉行が定めた御府内勧化場の範囲、③変死人・迷子の掲示を出す範囲、④江戸払の御構場所(町奉行支配場)、の四つに分け、②および③を朱引線、④を墨引線で示した絵図を添え、後者を重視する旨の答申をした。これに対して老中らはそれを覆して前者を採用する決定を下したとされている。しかし裁定には後者、すなわち町奉行支配場の範囲については変更を加えない旨も明記されており、従来その点には注意が向けられていなかった。作成された朱引図も不正確な部分が多く、評定所が十分な注意を払って作成したものとも思えない。またこの老中決定がその後広く周知された形跡もない。これを過大に評価するのは避けなければならない。都市江戸は町方と在方が混在し、支配のあり方も複雑であった。幕末に至るまで都市域を一義的に確定することは困難であったと考えるべきであると結論づけた。

3)高屋麻里子「江戸の屋敷所在地表記の理解–「諸向地面取調書」と江戸図による GIS 利用の試み」は、GIS を利用した江戸図の理解を目指したものである。

江戸図、東京図を現状地形と比較するために GIS での復元地図データ作成を試みてきた。

これまでに江戸と現代を比較する復元図としては主に「江戸情報地図」と「江戸復原図」が知られている。「江戸情報地図」は文字情報の集約に優れていることを確認し、データ入力の基本として用いることとして筑波大学で作業が進められた。

現状地形との対応を観察するうえで適している「江戸復原図」を用いて、GIS で現状地形と文久年間に相当する敷地境界の復元データを作成し、基本とするデータとして用いることを試みた。江戸城外堀の範囲について GIS で敷地境界を復元するポリゴンを作成し、「御府内往還其外

沿革図書」の各図と比較して各年代のポリゴンを作成することで敷地の継時的変化を示す可能性を示した。十分な測量精度が見込めない図も GIS で利用する方法を検討してきていたが研究分担者の指摘により「明治４年東京大絵図」を取り込み現状地形と直接比較し、「諸向地面取調書」の所在地表記と明治期に桑茶畑と記載されている敷地について用途の変遷を検討した。「御府内場末往還其外沿革図書」掲載範囲では地守付置の敷地に相当する可能性が見られるが、江戸中心部では GIS の復元ポリゴンと比較を行い必ずしも該当するとは限らない様子がうかがわれた。GIS での敷地復元ポリゴンの作成範囲を広げる必要があると考えられる。「御府内場末往還其外沿革図書」の一円之図は十分な測量精度を伴わないが、GIS を用いることで現状地形や各種地形図と比較可能である。掲載範囲の街場の発展は江戸期には限定的と見えるが、現代に継続する「町内」などの成立の背景には江戸期の成熟が影響すると推定できる。

4)松山恵「明治初年東京の武家地処分の実態と論理について–鉄道事業を手がかりに」は、東京の武家地処分の実態を、新橋-横浜間の鉄道事業用地に視点を据えて明らかにするとともに、当該鉄道事業に対してもいくつかの考察を加えようとしたものである。既往研究では軽視されがちだったものの、上記事業を実行するうえで、明治新政府は武家地を重要な足がかりとしていた。事業を主管する民部省は、なかでも東京湾岸沿いの諸藩邸を路線敷設ばかりでなく同省の拠点形成のためにも収用した。そうした実践は、新政府が全体として都市周辺部（「郭外」）にも利用範囲を広げ、支配を深化させる機会となった。もっとも、以上の動向は廃藩置県以前の制約下で進むものでもあった。当該エリアには依然、比較的多くの屋敷所持が各藩に対して認められ、それらの収用には様々な支障がともなった結果、いわゆる高輪築堤なども生成した。一方で、事業の推進では一定の藩邸収用が欠かせなかったが、その過程からはこれまで不明確だった武家地処分の実態が垣間みえる。すなわち各藩に所持が認められる屋敷について、新政府がそれらを段階的に没収してゆくプロセスでは政府首脳との近接度合いが影響し、そのことは最終的に各旧藩主（大名華族）家が一つ保持した屋敷の「質」などを左右した形跡がある。以上、本研究からは、明治初年における新政府と諸藩の関係や、以後の東京の都市社会のなかで大名華族邸が果たした役割といった諸課題を究明する上でも基礎となる事実が初めて明らかになった。

5)佐藤陽子「江戸曲輪内役屋敷拝領の変遷–老中・若年寄屋敷を中心に–」は、役屋敷に光をあてた報告である。

　曲輪内の屋敷拝領は幕閣役職者の入替で常に変動しており、老中・若年寄の屋敷拝領は史料「屋敷渡預絵図証文」が作成されていない事が実証されており、まず文献史料と絵図により屋敷位置を比定したデータを作成し、変遷の実態を検討するものである。大名小路を挟んで東側の区画で最初に老中屋敷となるのは宝暦 10 年(1758)以降である。元禄 11 年(1698)9 月の大火(勅額火事)により、それまで拝領していた外様徳島藩が転出、その後親藩転入を経て、側用人松平忠周の屋敷となり、宝永 5 年(1708)2 月綱吉の御成を受ける。その後は側用人・京都所司代・元老中等拝領後老中屋敷として幕末まで定着していく。将軍御成により格上げとなった地を中心に同街区に増え、さらに西側へと拡大されたことを確認した。次に石高の異なった老中がどのように配置されていったか等を分析した。正徳 5 年(1715)代替わりで小浜藩 10.3 万石酒井忠音は神田橋屋敷を向う屋敷共拝領し石高に見合う屋敷地を拝領した。その他手狭の対策として屋敷境界・隣地・向街区・堀向の街区を添屋敷として拝領していることも確認できる。結果として役屋敷は初期には西丸下・大手前・一橋であったが幕末には大手前 2 屋敷のみとなり、大名小路・日比谷にまで展開したことが指摘できる。

6)森下徹「屋敷改と吉川家江戸屋敷」は、萩藩の支藩にあたる吉川家が所持した江戸屋敷について、幕府による屋敷改めへの対応の仕方という面から事例を紹介した。吉川家が赤坂今井谷に屋敷をもったのは、延宝 7 年（1679）のことだった。そのとき幕府には萩藩から届けが出され、萩藩–旗本伊沢正次–伊賀衆の三者間での相対替えを申請していた。しかし実は吉川家が伊沢から買い取ったものであり、伊沢家から吉川家に対し料金の請取が提出されている。実態は、吉川家が伊沢家から買い取ったものでありながら、幕府へは萩藩名義の相対替えと申告していたのだった。こうして対外的には萩藩の陪臣とみなされていたなかで、公的な届けと実態とが異なったまま江戸に屋敷を有することになった。吉川家の江戸屋敷は、宝永元年から抱屋敷帳に登録されることになったものの、それ以降も繰り返された幕府の抱屋敷調査のなかで、その都度の対応を迫られている。もっとも居屋敷だったから規制の直接の対象ではなかったようだし、何より抱屋敷帳には登録済だった。にもかかわらず改のたびに対応を迫られ、吉川家名義であることを確認しなければならなかったのは、対外的には陪臣の地位にあった吉川家の固有な事情があったことが大きいが、拝領地ではなく、しかも無年貢地の抱屋敷だったことも関係していよう。

7)渋谷葉子「大名江戸屋敷における家臣の居住形態–尾張徳川家の「外宅」–」は、武家地変容の要因分析Ｃ居住に関わるもので、江戸における武家家臣の居住形態のひとつであった「外宅」について、大名の尾張徳川家の事例を検討したものである。武家の「外宅」は一般的に家臣が主家の所持屋敷でないところに居住する意だが、尾張徳川家の場合、その所持する屋敷地のうちを家臣が借地して独立住居を構える形態も「外宅」と称した事実が判明した。こうした「外宅」の用地は、尾張徳川家が幕末時点に所持・利用した 44 筆中 20 筆を占めていた。同家は 19 世紀以降、江戸屋敷を積極的に獲得して所持屋敷数が大名家中で突出するに至るが、それは「外宅」用地を確保したためで、その背景には同時期、10 代将軍徳川家斉に関わる養子が３代立て続けに当主を継いだことに関わったと理解される。これら当主はほとんど帰国しなかった。つまり江戸に居続けるため仕える家臣も在江戸の者が恒常的に多くなり、伴って 19 世紀以降、その住居不

足が問題化し、その解決の一策として「外宅」用地の確保が図られたのである。「外宅」に居住した家臣のほとんどが江戸に常住する定府の者で、その住居の形態は「切絵図」類の描写によれば各々の敷地が道に面して表門を構えており、したがって外見は一般の幕臣屋敷同様であったものと推定される。

8)岩淵令治「江戸屋敷における神仏公開と国元の本社・本寺−福岡藩赤坂中屋敷溜池天満宮をめぐって−」は屋敷内神社を検討したものである。江戸の武家屋敷には、屋敷神や藩主家が信仰するさまざまな神仏がおかれたが、それは屋敷内に閉じられていた。こうした中で、とくに 19 世紀にはいると屋敷内の神仏が公開されていくが、報告では、とくにこれまで未検討であった寺社側の動きに注目し、具体的には、太宰府天満宮から福岡藩赤坂中屋敷に勧請された溜池天満宮の公開過程を分析した。検討の結果、この公開は、幕末に財政がひっ迫した太宰府天満宮の提案によるものであることを明らかにした。また公開に際し、太宰府天満宮が富岡八幡宮と競合していたこと、江戸において宗教者のネットワークを利用したこと、神事の省略に対して反対し、また本地垂迹論にしたがって仏堂を建造することを主張して認められたこと、本尊の画像の授与を神威の低下を招くとして反対したこと、を明らかにすることができた。武家屋敷内の神仏の公開は、武家、町人・寺社の利害によって成立するが、とくに今回の事例では寺社と武家のそれぞれの利害が一致・対立しつつ実現に至ったことが確認できた。

9)藤川昌樹「大名江戸屋敷の構成と敷地規模の展開」は、大名屋敷の建築の構成を屋敷地規模との連関のもとに捉えることを試みたものである。まず、『匠明』「当代広間ノ図」所収の屋敷図をみると、大きく御成御殿・数寄屋廻り・表向御殿・奥向御殿・長屋（詰人空間）の五つの要素から構成されていることが分かる。これが当時の大名屋敷に求められた理想的な姿であった。既に内藤昌が指摘しているようにこの屋敷規模は 2 町四方の規模に近いものであった。しかし、現実には江戸城近くに諸大名に与えられた敷地の多くは 7,000 坪程度以下であり、ほとんどの大名屋敷は上記の五つの要素全てを満たすことはできなかった。しかしながら幕末の『諸向地面取調書』をみると、7,000 坪を超える上屋敷が 70 以上あり、全体の 27%を占めていたことがわかる。これは江戸城直下の西の丸下・大手前・大名小路で大名屋敷の敷地統合が進み大規模化した結果であり、一方で中心部から上屋敷は転出したことを意味している。外桜田で大規模化を果たした萩藩毛利家の上屋敷で近世初期から後期への屋敷構成の変化をみると、御殿空間では能舞台と池泉を伴う庭園が整備される一方、和姫御殿や家老小屋のように敷地内で住宅が独立化する様子が窺われる。また、詰人空間では内長屋が建設され大規模化するとともに、屋敷内に神社や馬場が成立し、初期の急造の屋敷が永続性をもつ屋敷へと転換していったことを指摘した。

10)増田晴夫「江戸時代初期の大名江戸屋敷の建築について−加賀藩龍口上屋敷を中心に−」は、新出の加賀藩龍口上屋敷絵図の分析を行ったものである。指図３枚と建地割図６枚からなり、景観年代は寛永 10 年（1634）と 20 年と推定することができる。

表御殿には御成御殿が併設されているが、他の江戸大名屋敷とは異なり、数寄屋門を設けていない。これは数寄屋御成を主導してきた秀忠から家光への代替わりにより、御成の内容が変化したことを反映しているものとみられる。家光は児小姓の風流踊りを好んだことで知られているが、御成御殿近くに児小姓の部屋が充実していることからもこのことを裏付けているといえる。寛永 20 年には、広間の能舞台が撤去され、御成御殿の書院の一部が表御殿に組み込まれ、そこに能舞台を設置している。江戸大名屋敷の書院と能舞台の組み合わせが、御成御殿を解体していくなかで生みだされていることを示す事例とみることができる。奥御殿には家光の養女大姫が輿入れをしているが、独立した門や玄関を備えておらず、将軍の息女の嫁ぎ先に建てられる御守殿が整う以前の形式といえる。将軍の娘であることよりも、前田家の一員となることに重きが置かれていた江戸時代初期の時代背景を表しているといえる。

11)加藤悠希「大名江戸屋敷の茶室」は、“ 数寄屋御成の時代 ”以降に大名江戸屋敷の茶室はどのように展開したか、という点について、主に指図から 17～18 世紀の大名江戸屋敷の茶室の展開を概観したものである。まず、大名江戸屋敷の茶室はその配置から、①御成書院周辺の茶室、②書院周辺の茶室、③居間・御座之間周辺の茶室、に大別して整理した（御殿部分に焦点を当てるため、庭園の茶屋等は除外）。その結果として、以下の傾向が確認された。①御成御殿周辺の茶室については、元和・寛永期の指図にみられ、独立棟で「御数寄屋」と称するものが多い。②書院周辺の茶室については、確認できる範囲では寛永以降 18 世紀を通じてみられること、独立棟でなく書院の棟の一画を区切って「囲」と記載されるものが多い。③居間・御座之間周辺の茶室についても、寛永以降 18 世紀を通じてみられ、名称は「囲」「数寄屋」とも存在して大きな偏りはみられない。また、用途としては①②は主に儀礼に関わるもの、③は日常・交際に関わるものと予想されたが、③に関しては、実際に大名の交際において茶事を伴う振舞が居間や時には寝所までを使って行われる事例があることも確認された。また、時代別にみると、①御成御殿周辺から②書院周辺へという変遷が読み取れる一方で、③御座之間周辺の茶室は、②書院周辺からより私的な領域に移行したというよりも、公的な領域の茶室とは別の系譜として理解されるべきであろうとの予察を得た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岩淵　令治	４．巻 -
２．論文標題 近世大名家における墓標の秩序について－小浜藩酒井家を事例に－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩淵　令治	４．巻 6
２．論文標題 新刊紹介 金行信輔著 「写真のなかの江戸－絵図と古地図で読み解く20の都市風景－」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 都市史研究	６．最初と最後の頁 145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松山　恵	４．巻 -
２．論文標題 明治期の民間の都市開発について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京の都市づくりのあゆみ	６．最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森下　徹	４．巻 32
２．論文標題 萩藩の藍専売と阿州藍売	５．発行年 2018年
３．雑誌名 鳴門史学	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松山恵	4．巻 111
2．論文標題 江戸から明治へ――神田における武家地の変遷	5．発行年 2020年
3．雑誌名 KANDAルネッサンス	6．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩淵令治	4．巻 914
2．論文標題 江戸の都市環境―問題の出発点として	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史地理教育	6．最初と最後の頁 4-9頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩淵令治	4．巻 42
2．論文標題 近世木簡研究の視座－東京都新宿区四谷一丁目遺跡を事例に－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 木簡研究	6．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩淵令治	4．巻 1
2．論文標題 論考 開かれた武家屋敷の神	5．発行年 2021年
3．雑誌名 江戸の武家屋敷ー政治 生活 文化の舞台	6．最初と最後の頁 107-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 森下　徹
2．発表標題 武家奉公人と地域研究の立場から
3．学会等名 大阪歴史協議会例会
4．発表年 2019年

1．発表者名 高屋麻里子・藤川昌樹
2．発表標題 歴史地図のGIS利用 町割の変遷にみる江戸都市構造の成熟過程 その1
3．学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
4．発表年 2019年

1．発表者名 李松竹・高屋麻里子・藤川昌樹
2．発表標題 「六大区沽券地図」と「御府内往還其外沿革図書」の町割表現の比較 町割の変遷にみる江戸都市構造の成熟過程 その2
3．学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
4．発表年 2019年

1．発表者名 梁美惠・高屋麻里子・藤川昌樹
2．発表標題 江戸城下南側における武家地の敷地形状及び所持者の変化 町割の変遷にみる江戸都市構造の成熟過程 その3
3．学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
4．発表年 2019年

１．発表者名 王之然・高屋麻里子・藤川昌樹
２．発表標題 大名下屋敷の立地と現状地形の標高分布との関係 町割の変遷に見る江戸都市構造の成熟過程 その4
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集
４．発表年 2019年

１．発表者名 松山　恵
２．発表標題 江戸から明治へ―神田における武家地の変遷
３．学会等名 NPO法人神田学会 「第166回都心トーク31」
４．発表年 2019年

１．発表者名 森下　徹
２．発表標題 岩国藩大坂蔵屋敷の設置と都市社会
３．学会等名 上海国際シンポジウム「日中都市史の研究と比較」
４．発表年 2018年

１．発表者名 森下　徹
２．発表標題 岩国藩大坂蔵屋敷の成立
３．学会等名 イェールーOCUジョイントセミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩淵　令治
２．発表標題 小浜藩酒井家墓所の変容－近世から近代へ
３．学会等名 科研「石造物調査に基づく新たな中近世史の構築」公開シンポジウム「石に刻まれた歴史」
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩淵　令治
２．発表標題 古地図からみる江戸の駒込
３．学会等名 東洋文庫ミュージアム講演会
４．発表年 2018年

１．発表者名 渋谷 葉子
２．発表標題 尾張徳川家戸山屋敷とその庭園
３．学会等名 「新宿の遺跡2019－特集　尾張徳川家戸山屋敷とその周辺－」所蔵資料展 関連連続講演会「尾張徳川家戸山屋敷とその周辺」
４．発表年 2019年

１．発表者名 KATO Yuki
２．発表標題 Iron in Japanese Traditional Wooden Architecture
３．学会等名 Asian Urban Studies: QR Program Symposium
４．発表年 2019年

１．発表者名 渋谷葉子
２．発表標題 小日向「切支丹屋敷」とシドッチ神父
３．学会等名 文京区令和３年度文化財講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩淵令治
２．発表標題 四谷塩町からみる江戸のまち「論考 四谷に土地を持つ」
３．学会等名 新宿区新宿歴史博物館
４．発表年 2021年

１．発表者名 高屋麻里子、藤川昌樹
２．発表標題 御府内往還其外沿革図書」と標高分布 -江戸へのGIS利用の試み その１-
３．学会等名 日本建築学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 城野のどか、大原千乃、多田裕亮、高屋麻里子
２．発表標題 GISを用いた初期江戸の大名小路周辺の比較 江戸へのGIS利用の試み その３
３．学会等名 日本建築学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大原千乃、城野のどか、多田裕亮、高屋麻里子
２．発表標題 初期江戸における大名小路周辺の表現の比較 -江戸へのGIS利用の試み その２-
３．学会等名 日本建築学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高屋麻里子
２．発表標題 萩藩江戸上屋敷和姫住居の設備分布と平面構成
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計24件

１．著者名 森下　徹，塚田孝編	４．発行年 2019年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 360
３．書名 シリーズ三都　大坂巻　「蔵屋敷から見る民衆世界」	

１．著者名 森下　徹，馬強学他編	４．発行年 2019年
２．出版社 商務印書館	５．総ページ数 471
３．書名 中日城市史研究論集　「岩国藩大坂蔵屋敷の設置と都市社会」	

１．著者名 岩淵　令治，吉田 伸之編	４．発行年 2019年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 360
３．書名 シリーズ三戸　江戸巻　「大店」	

１．著者名 渋谷　葉子	４．発行年 2020年
２．出版社 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター編・発行	５．総ページ数 244
３．書名 新宿区四谷一丁目遺跡―東京都市計画四谷駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う調査― 第３分冊（史料・分析編）「尾張徳川家年寄渡辺半蔵家の江戸屋敷」	

１．著者名 渋谷　葉子	４．発行年 2019年
２．出版社 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター編・発行	５．総ページ数 573
３．書名 文京区大塚遺跡―東京都交通局旧大塚支所解体工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―　「大塚遺跡における江戸時代の土地利用―幕臣屋敷を中心に―」	

１．著者名 増田　晴夫	４．発行年 2019年
２．出版社 東京大学埋蔵文化研究室	５．総ページ数 186
３．書名 東京大学構内遺跡調査研究年報12　「加賀藩龍口上屋敷の絵図について」	

１．著者名 森下徹・岩淵令治・渋谷葉子・岩本薫ほか計214名　都市史学会編	４．発行年 2018年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 688
３．書名 日本都市史・建築史事典	

１．著者名 渋谷 葉子　大成エンジニアリング株式会社編	４．発行年 2018年
２．出版社 メゾンドール早稲田マンション建替組合	５．総ページ数 5,111
３．書名 新宿区 尾張徳川家下屋敷跡Ｘ－メゾンドール早稲田建替計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　「尾張徳川家戸山屋敷庭園の池泉」	

１．著者名 松山　恵	４．発行年 2019年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 288
３．書名 都市空間の明治維新――江戸から東京への大転換	

１．著者名 岩本　馨　都市の危機と再生研究会編	４．発行年 2019年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 399
３．書名 危機の都市史―災害・人口減少と都市・建築　「大火と武家地―明暦の大火再考」「都市の危機と再生」	

1．著者名 加藤悠希	4．発行年 2022年
2．出版社 奈良文化財研究所	5．総ページ数 344
3．書名 近世庭園の研究 安土桃山 江戸時代「近世初期における作事 作庭と大工の職分 醍醐寺三宝院および 島津家江 屋敷の事例から」	

1．著者名 渋谷葉子	4．発行年 2022年
2．出版社 公益財団法人東京都スポーツ文化事業 東京都埋 文化財センター	5．総ページ数 361
3．書名 港区高輪南町遺跡 東京都市計画道路事業幹線街路環 第４号線整備に伴う 衆議院高輪議員宿 跡地埋 文化財発掘調 「信濃飯山藩本多家江 屋敷について」	

1．著者名 渋谷葉子	4．発行年 2021年
2．出版社 公益財団法人東京都スポーツ文化事業 東京都埋 文化財センター	5．総ページ数 363
3．書名 新宿区王寺町遺跡Ｘ 王寺宿 埋 文化財包 地の発掘調 「江 時代の「川田久保」地域に関 する一考察 土地利用の 遷と尾張 川家 」	

1．著者名 渋谷葉子	4．発行年 2021年
2．出版社 公益財団法人東京都スポーツ文化事業 東京都埋 文化財センター	5．総ページ数 362
3．書名 中央区築地市場跡遺跡 東京都市計画道路環 ２号線（築地）整備事業に伴う埋 文化財発掘調 「尾 張 川家木挽町築地屋敷について」	

１．著者名 渋谷葉子	４．発行年 2021年
２．出版社 柊風社	５．総ページ数 791
３．書名 大名の江戸暮らし事典	

１．著者名 岩淵令治、 渋谷葉子	４．発行年 2021年
２．出版社 港区	５．総ページ数 503
３．書名 『港区史』第２ 通史編 近世 上	

１．著者名 渋谷葉子	４．発行年 2020年
２．出版社 公益財 法人東京都スポーツ文化事業 東京都埋 文化財センター	５．総ページ数 264
３．書名 港区大和芝村藩織田家屋敷跡遺跡 都立新国際高等学校（仮 ）新設に伴う埋 文化財発掘調 「越後 沢海藩溝口家 大和芝村藩織田家白金台屋敷について」	

１．著者名 岩本馨	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 296
３．書名 明暦の大火 「都市改造」という神話	

１．著者名 吉田 伸之、森下 徹	４．発行年 2020年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 196
３．書名 全体史へ－山口啓二の仕事	

１．著者名 福田千鶴 武井弘一編 岩淵令治	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 353
３．書名 鷹狩の日本史「江戸における鷹匠の交流」	

１．著者名 岩淵令治	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 494
３．書名 勤番武士の江戸在記 国枝外右馬江 詰中日記	

１．著者名 岩淵令治	４．発行年 2021年
２．出版社 港区	５．総ページ数 500
３．書名 港区史 近世下	

１．著者名 国立歴史民俗博物館、花王株式会社	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 224
３．書名 〈洗う〉文化史	

１．著者名 福田千鶴 藤實久美子編 岩淵令治	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 494
３．書名 近世日記の世界 「初登江都日記」と「国枝外右馬江 詰中日記」ー江戸勤番武士の日記を読む」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森下　徹 (MORISHITA TOHRU) (90263748)	山口大学・教育学部・教授 (15501)	
研究分担者	岩淵　令治 (IWABUCHI REIJI) (90300681)	学習院女子大学・国際文化交流学部・教授 (32699)	
研究分担者	渋谷　葉子 (SHIBUYA YOKO) (70462257)	公益財団法人徳川黎明会・徳川林政史研究所・非常勤研究員 (72623)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高屋　麻里子 (TAKAYA MARIKO) (90837717)	滋賀県立大学・環境科学部・講師 (24201)	
研究分担者	松山　恵 (MATSUYAMA MEGUMI) (40401137)	明治大学・文学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	岩本　馨 (IWAMOTO KAORU) (00432419)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授 (14303)	
研究分担者	加藤　悠希 (KATO YUKI) (80790815)	九州大学・芸術工学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	増田　晴夫 (MASUDA HARUO) (20810964)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・特任助教 (12601)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	宮崎　勝美 (MIYAZAKI KATSUMI)	前東京大学史料編纂所・教授	
研究協力者	金行　信輔 (KANEYUKI SHINSUKE)	前千葉大学工学部・准教授	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	稲垣　智也 (INAGAKI TOMOYA)	文部科学省・文部科学技官	
研究協力者	佐藤　陽子 (SATOH YOKO)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関